

<論 説>

マルクス『資本論』第1部第1篇「商品と貨幣」における諸論点

－抽象的人間的労働(1)－

堀内 健一

目 次

はじめに

1. マルクスは抽象的人間的労働についてどのように論じているか
 - (1) 「第1章 商品」の全体の叙述について
 - (2) 第1節 商品の2つの要因
 - (3) 第2節 商品に表わされる労働の二重性
 - (4) 第3節 交換価値または価値形態
 - (5) 第4節 商品の呪物的性格とその秘密
2. 大谷禎之介氏の所説
3. 抽象的人間的労働をどのようにとらえるか
おわりに

はじめに

マルクスの理論に対する理解を巡って、マルクス研究者の内部で論点となっているものは数多くある。決着をみていないものの中には、『資本論』冒頭の第1部第1篇 商品と貨幣 第1章 商品で展開されている概念を巡るものもある。しかも、マルクスの理論体系において根幹の1つとなる概念であったりする。それは「抽象的労働」、したがってまた「労働の二重性」である。

これについては、古くから論争があり、簡単に言えば、「抽象的労働」、「労働の二重性」が歴史的概念なのか、超歴史的概念なのか、というものである。このような論点設定に則していえば、前者の見解に立つ研究者が多数であるが、後者の見解にたつ優れた有力な研究者も存在する。おそらく、基本的な概念を巡っていつまでも決着がつかないのは、1つには、見解の相違があり続けても理論体系全体を揺るがすほどの重大な問題ではないこと、また1つには、『経済学批判』も含めれば、マルクス自身が何度か改訂している現行版のテキスト部分ではある

が、もともと両者の立場からでも読みとれるような、読者側に論点を提起させる叙述になっていること、また1つには、論点の設定自体が誤読や一面的理解などにより失敗していること、などの理由が考えられる。

本稿ではどちらの見解が正しいのかについて議論しない。前述の決着がつかない諸事情が仮説として有力であると筆者は考えているからである。この問題に関する過去の論考をみても、結局は、主張の根拠となるマルクスのテキストをどこから引いてくるかによって結論が左右されているように思われるし、また、その逆のこともあるとも思われる。

そこでまず、マルクスがこれらの概念について、どのように論じているのか、『資本論』第1部第1篇第1章のテキストに沿って検証したい。そして今回、対象としている範囲において、抽象的労働に関する語句が出てくるところはすべてみて、断片的、一面的な理解を防ぐことにしたい。マルクスの理論における特徴でもあるが、ある語句の意味が一義的なままではとどまらず

展開していくためである¹。

『資本論』第1部第1篇の部分には膨大な研究があり、読み方や研究姿勢にもさまざまなものがあるが、ここではあまり過去の研究に拘束されすぎずに、できるだけ筆者自身がマルクスから直接受けとれるものを整理する。そして、見逃されたり忘れ去られたりしてきた注目に値する事実や論点を見つけ出す機会になることを望んでいる。この作業で筆者が理解したマルクスの理論的分析を通して、諸論者の研究を参照していきたい。

そこで本稿では、さきに示した論点では後者の立場で、抽象的労働を超歴史的概念とみる大谷禎之介氏の所説を1つのがかりにして、マルクスが捉えたその概念の理解を深めることにしたい。大谷氏は、抽象的労働とは「生産費用」のことであり、それがいかなる社会形態においても存在することを強調される。そして、それが商品生産社会においては価値として商品に対象化するのだと主張される²。これはまず、「費用」という用語からして、マルクスの叙述に対

して、独自のものとなっていると筆者には考えられる。したがって、大谷氏の叙述がマルクスのものに対してどのように独自のものになっているのか考察する。そして、以上の作業を通して、抽象的労働という概念をどのようにつかむべきなのか、筆者なりの見解を示す。あらかじめ簡単に示しておく、抽象的労働は、第1章の範囲でいえば、つぎの3つの諸規定の統一として把握されるべきと考える。すなわち、1) 価値実体としての抽象的労働、2) 一般的価値形態(貨幣形態・価格形態)としての抽象的労働、3) 社会的労働の形態としての抽象的労働、である。

1. マルクスは抽象的人間的労働についてどのように論じているか

(1)「第1章 商品」の全体の叙述について

『資本論』³第1部第1篇第1章 商品 は、拙稿冒頭の目次にあるように4節からなっている⁴。ここでまず、筆者が理解する、この第1章各節における主題と結論の概要を示しておきたい⁵。

- 1 久留間鮫造「マルクスには普通の経済学教科書に見られるような定義がない。商品の場合もそうである。それは順々に発展する諸規定の統一としてのみ把握される。」(向坂逸郎・宇野弘蔵編『資本論研究—商品及交換過程—』河出書房、1948年、87ページ)参照。
- 2 「マルクスが具体的労働の捨象によってつかみだしたのは、たんなる抽象的人間的労働ではない。抽象的人間的労働の結晶であり、対象化である。これは商品に固有のものである。抽象的人間的労働はあらゆる社会に存在する労働の一側面であるが、抽象的人間的労働の対象化は商品に固有のものである」(「商品および商品生産に関するいくつかの問題について」『資本論草稿にマルクスの苦闘を読む』(『資本論』第2部第8稿全文とその関連資料を収録)桜井書店、2018年、451ページ)。
- 3 本稿では、主に現行版(第4版)の『資本論』(MEGA II/10)を参照する。日本語訳としては次のものを参照する。マルクス=エンゲルス全集刊行委員会(岡崎次郎)訳『合本 資本論 全』大月書店、1982年。同書からの引用箇所はK.I,S.~と記す。マルクスは自身で『経済学批判』から『資本論』第1巻の初版、初版から2版まで直接、叙述の変更を行っている。現行版までの目次をみると、それを進めることで、第1章および第2章の内容は、次第に分化してきていることがわかる。これは、問題を多面的に純粋に、同時に、それぞれの面についてより完全に考察する、というように研究が深化してきたことの反映とみる。したがって、前の叙述は後の叙述を理解するために参考にするという方針をとる。
- 4 第4節の見出し「商品の呪物的性格とその秘密」にある「呪物的」(Fetisch)には、翻訳者岡崎次郎は、改訂前に「物神的」という日本語をあてていた。「呪物的」に訳を変更した経緯については、同氏著、『マルクスに凭れて六十年 自嘲生涯記』青土社、1983年、296ページを参照されたい。
- 5 マルクスは、この第1章の分析、叙述の仕方について、『資本論』への批判に反駁する形になっているが、自身によって書き残している。第1章の叙述全体の概要をつかむために、『アドルフ・ヴァーグナー著「経済学教科書」への傍注』(『マルクス=エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968年、355-385ページ)の記述(1879年後半~1880年11月までに執筆された遺稿)は有用であると考えるので、ここではこれを大いに参考にした。久留間鮫造は、『原典対訳 マルクス経済学レキシコン②方法I』大月書店、1969年、にこのマルクスの記述を『資本論』におけるマルクスの研究は商品の分析から始まる。——彼はなぜこれではじめているのか、また、彼はこれをどのようにやりとげているのか?という小項目の見出し(中項目Ⅲ. 分析、分析の方法18.『資本論』における商品の分析)を付して、収録している。

第1節において、研究の出発点をなすものは、今日の社会の労働生産物において現われる、最も簡単な社会的形態である「商品」であることが示され、それが分析される。そして、さしあたりまず、それが現象する形態において分析される。ここで、商品は一面においては、使用価値であり、他面においては、交換価値の担い手、そしてこの視点のもとではそれ自身「交換価値」であることが発見される。この交換価値をさらに分析すると、交換価値は、商品に含まれている「価値」の「現象形態」であり、自立的な表示様式にすぎないことが示される。そこで、マルクスはこの価値を分析して、次のように結論する。

「この章のはじめに、普通の言い方で、商品は使用価値であるとともに交換価値である、と言ったが、これは厳密に言えばまちがいであった。商品は、使用価値または使用対象であるとともに『価値』なのである。商品は、その価値が商品の自然形態と違った独特な現象形態、すなわち交換価値という現象形態をもつとき、そのあるがままのこのような二重物として現われる」⁶。労働生産物の具体的な社会的姿態である「商品」は、一方においては使用価値であり、他方においては「価値」(交換価値ではない、なぜなら単なる現象形態はそれの固有の内容ではないから)であることが明らかにされる。そして、商品価値の実体は抽象的労働であること、その尺度は労働量(時間)であり、社会的必要労働時

間であること、が明らかにされる。

第2節では、商品のこの二重存在のうちには商品を生産する労働の二重の性格が一つまり、有用な労働、すなわち諸使用価値を作り出す諸労働の具体的な様態、および抽象的な労働、いかなる「有用な」仕方でそれが支出されるかに無関係な労働力の支出としての労働、という二重の性格が自らを表示しているのだということ(この点を基礎にしてのちに生産過程の説明がなされる)⁷、が明らかにされる。

第3節、価値形態論では、一商品の価値は、自身の使用価値からは分離・独立して、他商品の使用価値において、すなわち他商品の自然形態において、自らを表示するのだということが明らかにされる。交換価値の発展が、商品世界からそれらの価値表現のために排除される一般的等価物としての貨幣商品、商品の貨幣形態、価格形態をもたらすことが詳説され、最終的には、すべての商品価値は、価値体としての使用価値・金(貴金属)という物的形態をとることが明らかにされる。この最終形態は、マーケットですべての商品の価値は、金の一定分量で表現されることで、その大きさが比較されるものになっていること、つまり、商品は価格形態をもち、例えば、人々は商品の価値を金何円という形で言い表していること、このような物としての金の分量がいっさいの商品の価値を表すという現実⁸が、いかにして成立しているかを説明している。

6 K.I,S.75.

7 久留間鮫造は、第1部第1篇と第3篇・第4篇の資本の生産過程とにおける「労働の二重性」の取り扱い方の相違について次のように述べている。「冒頭の所では、商品は所与のものとして前提され、かかるものとして分析されたのに止って、その生産の過程は考察されなかった。従って労働の二重性もまた、商品に具体化された静的な状態において観察されただけで、アクティブな状態においては観察されなかった。それらは、資本の生産過程を論ずるあそここのところではじめて考察されている。これは一定の理由に基づいてなされていることであり、それ自体に問題と成り得るのであるが、とにかくそういうことになっているので、アクティブな状態における労働の二重性はあそここの所ではじめて明らかになる。」(向坂・宇野編、前掲書、98ページ)。

8 現代の不換制における、価格としての金のあり方について、筆者は次の三宅義夫や久留間健の見地とほぼ同じ見地に立っている。「金本位制とは、価値尺度である商品一貨幣商品一が金である場合を指す。いいかえれば、円とかポンドとかドルとか金何グラムの貨幣名であるか、銀何グラムの貨幣名であるかによって、その国の貨幣制度が金本位制であるとか銀本位制であるということになる。そして、こうした金本位制下で金属鑄貨だけでなく銀行券が発行されている場合には、金の自由鑄造(略)、金の自由溶解(略)、金の自由輸出入(略)、金の自由兌換(略)、この4つが行われているとき、それは制度として完成された金本位制ということが出来る。」「兌換が停止されているさいには、銀行券は

第4節、物神性論では、そもそもなぜ労働が商品の価値として、そしてその継続時間による労働の計測が労働生産物の価値量に、表わされるのか、という問題が扱われる。そこでは、生産物の価値および生産物間の社会関係は、本当は人間の労働の社会的性質であり、人間の社会関係にほかならないのだということが明らかにされている。同時に、私的労働にもとづく自然発生的な分業社会では、人間の労働の社会的性格は生産物の価値という形をとり、私的生産者の労働の社会的関係は彼らの生産物間の社会的関係という形を必然的にとることが明らかにされていると考えられる。

マルクスはこの節について、商品の交換価値、価値、社会的使用価値の存在の歴史的局限性をつぎのように強調する⁹。「労働生産物の少なくともある部分が、使用対象物が、『商品』として機能するところにおいてのみ出現するのだから、そしてこのことは最初からではなく、ある一定の社会的発展期において、すなわち歴史的発展のある一定の段階において、はじめて生ずることなのだから、したがって『交換価値』は一つの『歴史的』概念なのである。」「交換価値は複数の諸商品が、種々の商品種類が、見いだし

れるところのみにみ存在する」。「商品の『価値』は、他のあらゆる歴史的社會形態においても——価値とは異なった形態においてではあるけれども——同様に存在するところのものを、すなわち『社会的』労働力の支出として存在する限りにおいての労働の社会的性格を、たんに一つの歴史的に発展した形態において表現するものにすぎない」。「商品の『価値』がこのように、あらゆる社会形態に存在するもののある特定の歴史的形態にすぎないとすれば、商品の『使用価値』を特徴づける『社会的使用価値』もまた同様である。」

(2) 第1節 商品の2つの要因

ここからは、本稿での問題意識に沿って、マルクスの記述から「抽象的労働」がどのような意味をもって展開されているのか、そのポイントとなるところを順次みていきたい。第1節は、いわゆる価値実体論である。マルクスの分析の叙述の順序はこうであった。①使用価値の分析→②交換価値の分析→③2商品の交換関係を示す等式における使用価値の捨象、等置による「労働生産物」の析出¹⁰→④そこでの使用価値を生産した有用労働の捨象による「同じ人間の労働・

一定の量を表わすものではなく、円という貨幣名がいい表わす量は、確定され固定された量ではなくなる。」「兌換停止下では右のように、円が表わす量は確定した固定した量ではなくなる。いいかえれば、価格の度量標準は、金何グラムという固定した重量として定められていないことになる。したがって、価格の度量標準としての金の機能は、一したがってまた価値尺度機能も一いちじるしく阻害されることになる。だが兌換停止下においても、円は、変動にさらされているがある量をいい表わしている。円は銀何グラムではなく、金何グラムかを表わしていることには変わりはない。金はいぜんとして貨幣たる地位を占めているのであって、このことは目にふれるものとしては、こんにち主要な資本制国の通貨当局がいずれもいぜんとして金を対外支払準備として保有していることに現われている。さきに金本位制とは価値尺度である商品—貨幣商品—が金である場合を指す、としたが、金がお貨幣たる地位を占めているという意味では〔傍点は引用者〕兌換停止下においてもなお金本位制であることを失っていないのである。往々、金本位制が崩壊して「紙幣本位制」となったなどといわれているが、そのようなものではない。」(三宅義夫『金融論』〔新版〕有斐閣、1981年、187～192ページ)。

「金が貨幣だということは、私的所有にもとづく商品経済の特質と結びついている。金はいわば私的所有にもとづく経済社会の物質的な象徴だといってもよい。不換制下では、一定の限度内ではあるが、私的所有の部分的な否定あるいは商品経済の基本的な法則である価値法則にたいする侵害が生じ、経済法則が純粹に貫徹するかわりに、その外部からの侵害とそれにたいする反作用という形をとおして、間接的に貫徹する。貨幣制度が金から離れ、その結果、確定量としての価格の度量標準がその意味を失うという、不換制下における価値尺度機能の変容は、このような不換制下での資本主義経済の変容に対応している。」(久留間健『貨幣・信用論と現代』大月書店、1999年、137ページ)。

9 マルクス、前掲書、376～377ページ。

10 「労働生産物の有用性といっしょに、労働生産物に表されている労働の有用性は消え去り、したがって

抽象的労働」の析出→⑤「労働生産物」に残る人間労働力の支出のただの凝固物、人間的労働という労働生産物に共通な社会的実体の結晶としての価値の指摘¹¹。

マルクスは、つぎのようにここまでの研究をまとめる。「諸商品の交換関係そのもののなかでは、商品の交換価値は、その使用価値にはまったくかわりのないものとしてわれわれの前に現われた。そこで、実際に労働生産物の使用価値を捨象してみれば、ちょうどいま規定されたとおりの労働生産物の価値が得られる。だから、商品の交換関係または交換価値のうちに現われる共通物は、商品の価値なのである。」「ある使用価値または財貨が価値をもつのは、ただ抽象的人間労働がそれに対象化または物質化されているからでしかない。」¹²

次に、商品の価値規定に移り、使用価値の価値量を規定するものとして「社会的必要労働時間」が示される。それは、商品の「価値実体」をなす労働の量であるが、この労働は、同じ人間の労働であり、1つの同じ人間労働力の支出とみなされる¹³。

以上の「価値実体」について、筆者はつぎのように受けとめている。交換関係にある商品の使用価値の等置の内実は、有用性が消去された単なる労働生産物、さらには労働の有用性、具体的形態が消去され、諸労働の区別が無くなった、「同じ人間の労働＝抽象的労働」、「同じ人間労働力の支出」であり、この抽象的に捉えられた同質の、あるいは同種の労働が価値の実体である。

(3) 第2節 商品に表わされる労働の二重性

前節で指摘された、商品に含まれる労働の二面的な性質について、ここでさらに詳論される。ここではとくに、前節の内容に対して、なにが特徴であるのかを指摘したい。

最初の研究では、商品生産社会における多種多様な使用価値¹⁴を生産する有用労働が、私的生産にもとづく社会的分業を形成していることが指摘される。

つぎに、価値を形成する労働についての考察に移る¹⁵。まず、前節で明らかにされた価値実体としての「同質の人間の労働」について言及

またこれらの労働のいろいろな具体的形態も消え去り、これらの労働はもはや互いに区別されることなく、すべてことごとく同じ人間労働に、抽象的人間労働に、還元されている」(K. I, S.52)。

- 11 「無差別な人間労働の、すなわちその支出の形態にはかわりのない人間労働力の支出の、ただの凝固物のほかにはなにもない。これらの物が表わしているのは、ただ、その生産に人間労働力が支出されており、人間労働が積み上げられているということだけである。このようなそれらに共通な社会的実体の結晶として、これらのものは価値—商品価値なのである」(K. I, S.52)。
- 12 K. I, S.53.
- 13 「諸価値の実体をなしている労働は、同じ人間労働であり、同じ人間労働力の支出である。商品世界の諸価値となって現われる社会の総労働力は、無数の個別的労働力から成っているのではあるが、ここでは1つの同じ人間労働力とみなされるのである。これらの個別的労働力のおおのは、それが社会的平均労働力という性格をもち、このような社会的平均労働力として作用し、したがって一商品の生産においてもただ平均的に必要な、または社会的に必要な労働時間だけを必要とするかぎり、他の労働力と同じ人間労働力なのである」(K. I, S.53)。
- 14 前節の最後には、次のような記述があった。「商品を生産するためには、彼は使用価値を生産するだけでなく、他人のための使用価値、社会的使用価値を生産しなければならない。(略) 商品になるためには、生産物はそれが使用価値として役立つ他人の手に交換によって移されなければならない」(K. I, S.53)。
- 15 「価値としては、上着とリンネルとは、同じ実体をもった物であり、同種の労働の客体的表現である。」「生産活動の規定性、したがってまた労働の有用的性格を無視するとすれば、労働に残るものは、それが人間の労働力の支出であるということである。裁縫と織布とは、質的に違った生産活動であるとはいえ、両方とも人間の脳や筋肉や神経や手などの生産的支出であり、この意味で両方とも人間労働である。それらは、ただ、人間の労働力を支出するための2つの違った形態でしかない。たしかに、人間の労働力そのものは、あの形態やこの形態で支出されるためには、多少とも発達していなければならない。しかし、商品の価値は、ただの人間労働を、人間労働一般の支出を、表わしている」(K. I, S.58)。

され、さまざまな有用労働の捨象による「人間の労働力の支出」が再提示される。しかし、本節では、質的に異なる有用労働が、人間労働力を支出するための「諸形態」としてあつかわれる。つまり、つぎのように順序が逆転している。前節：①さまざまな有用労働→②同じ人間の労働、本節：①同じ人間の労働→さまざまな有用労働。この「反転」は、いかなる意味をもつのか。価値を形成する労働という観点から見れば、商品の価値は、ただの人間の労働を、人間労働一般の支出を表わし、使用対象であるとともに価値の担い手となる使用価値を形成する有用労働は、その人間の労働の諸形態にすぎないものになる。商品生産社会では、労働はまずもって価値の形成者として、同等な人間的労働として、人間的労働という同じ社会的な単位として妥当している。そして、社会的使用価値の形成者としての労働は人間の労働の諸形態をなすのである。

つづいてつぎのように、価値実体としての「人間的労働の質」について論及される。「使用価値としての上着やリンネルは、目的を規定された生産活動と布や糸との結合物であり、これに反して価値としての上着やリンネルは単なる同質の労働凝固であるが、それと同じように、これらの価値に含まれている労働も、布や糸に対するその生産的作用によってではなく、ただ人間の労働力の支出としてのみ認められるのである。裁縫や織布が使用価値としての上着やリンネルの形成要素であるのは、まさに裁縫や織布の互いに違った質によるものである。裁縫や織布が上着価値やリンネル価値の実体であるのは、ただ裁縫や織布の特殊な質が捨象されて両者が同じ質を、人間労働という質をもっているかぎりでのことである。」¹⁶

このように、人間的労働の質的側面について述べた後に、商品に含まれている価値量との関

連では、もはやそれ以外には質を持たない人間労働に還元されていて、ただ量的にのみ認められることが述べられる。

「しかし、上着やリンネルは価値一般であるだけでなく、特定の大きさの価値である。」つまり、商品に含まれている労働は、使用価値との関連ではただ質的に認められるとすれば、価値量との関連では、もはやそれ以外には質を持たない人間労働に還元されていて、ただ量的にのみ認められるのである。前のほうの場合には労働のどのようにしてとどんなが問題なのであり、あとのほうの場合には労働のどれだけが、すなわちその継続時間が、問題なのである。」¹⁷

そして、この節の最後の叙述¹⁸では、さきの「人間的労働の質」に立ち返り、すべての商品に含まれる労働は、まず、人間の労働力の支出であることが確認される。これは、商品生産社会、つまり価値を生産する社会に現れる、労働の独自な性格である。その人間の労働力の支出の二面性として、商品価値を形成する「同等な人間的労働または抽象的労働」、その諸形態である、使用価値を生産する「具体的有用労働」が明示される。ここでの叙述の順序は、さきに筆者が指摘した「反転」が反映されている。

ここでひとつ注意しておきたい点はつぎのことである。本節で明らかにされている「労働の二重性」とは、本節の見出しにある「商品に表わされる労働の二重性」、あるいは冒頭の本文にある「商品に含まれている労働の二面的性質」のことであり、単なる「労働の二重性」ではない。商品の交換関係のなかから析出された、商品の価値として対象化する社会的実体としての同等な人間的労働・抽象的労働と、その諸形態である、使用価値を生産する具体的有用労働とのことをさして、「労働の二重性」と呼んでいるのである。

16 K. I, S.59～60.

17 K. I, S. 60.

18 「すべての労働は、一面では、生理学的意味での人間の労働力の支出であって、この同等な人間労働または抽象的人間労働という属性においてそれは商品価値を形成するのである。すべての労働は、他面では、特殊な、目的を規定された形態での人間の労働力の支出であって、この具体的有用労働という属性においてそれが使用価値を生産するのである」(K. I, S.61)。

(4) 第3節 交換価値または価値形態

第3節での課題は、これまでの商品価値の分析から得られた、価値実体の理論的認識のうえに、諸商品の価値関係に含まれている価値表現のメカニズムと商品の貨幣形態（価格形態）を明らかにすることである¹⁹。マルクスは、価値表現の秘密は、「人間労働一般であるがゆえの、またそのかぎりでの、すべての労働の同等性および同等な妥当性」と示唆している²⁰。ここでは、それがどうしてなのか、そして、「同等な人間的労働・抽象的労働」がどのような意味でここで新たに受け取るのか確認する。

マルクスは、「A単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」で、2つの商品の価値関係から出発する。ここでの着目すべき点は、①相対的価値形態について、量的側面を捨象して質的な面だけを考察すること²¹。ここで、リンネル（商品A）＝上着（商品B）が等式の基礎として与えられ、商品Bの商品Aとの質的等置が商品A自身の価値表現になること。②一商品の等価形態は、その商品の他商品との直接的交換可能性の形態であること、である。

①のことがいえる根拠はつぎのものである。「価値関係の媒介によって、商品Bの現物形態は商品Aの価値形態になる。言いかえれば、商品Bの身体は商品Aの価値鏡になる。商品Aが、価値体としての、人間労働の物質化としての商

品Bに関係することによって、商品Aは使用価値Bを自分自身の価値表現の材料にする。商品Aの価値は、このように商品Bの使用価値で表現されて、相対的価値の形態をもつ²²。

②のことがいえる根拠はつぎのことである。

1) 使用価値がその反対物の、価値の現象形態になること。2) 具体的労働がその反対物である抽象的人間的労働の現象形態になること。3) 私的労働がその反対物の形態すなわち直接に社会的な形態にある労働になること。

①②のメカニズムはこうである。1) 上着が価値物としてリンネルに等置される。→2) 上着生産労働（裁縫）がリンネル生産労働（織布）に等置される。→3) 織布との等置は、裁縫労働を、抽象的労働という両方に共通な性格に還元する。→4) 織布も価値を生産するかぎりでは、抽象的労働である（回り道をした、リンネルの価値なししている労働の独自の性格を表現）。

しかし、人間的労働は、価値を形成するが、それそのものは価値ではないので、表現としてこれだけでは不十分である。人間的労働は、凝固状態において、対象的状态において、価値になるのであるから、「リンネル価値を人間労働の凝固として表現するためには、それを、リンネルそのものとは物的に違っていると同時にリンネルと他の商品との共通な『対象性』として表現しなければならない。」²³

19 「諸商品は、それらの使用価値の雑多な現物形態とは著しい対象をなしている1つの共通な価値形態——貨幣形態をもっているということだけは、だれでも、(略)よく知っていることである。しかし、いまここでなされなければならないことは、(略)この貨幣形態の生成を示すことであり、したがって、諸商品の価値関係に含まれている価値表現の発展をその最も単純な最も目立たない姿から光まばゆい貨幣形態に至るまで追跡することである。これによって同時に貨幣の謎も消え去るのである」(K. I, S.62)。

20 K. I, S. 74. 『資本論』初版の価値形態論では、そこでの目的に関して、「決定的に重要なことは、価値形態と価値実体と価値の量との内的で必然的な関係を発見する(傍点—マルクス)」(S.34, 江夏美千穂訳『初版資本論』幻燈社書店、1983年、58ページ) ことであつたと記述されている。

21 「一商品の単純な価値表現が二つの商品の価値関係のうちにどのように潜んでいるかを見つけ出すためには、この価値関係をさしあたりまずその量的な面からは全く離れて考察しなければならない。人々はたいていこれとは正反対のことをやるのであって、価値関係のうちに、ただ、二つの商品種類のそれぞれの一定量が互いに等しいとされる割合だけを見ているのである。人々はいろいろな物の大きさはそれらが同じ単位に還元されてから初めて量的に比較され得るようになるということを見落としているのである。ただ同じ単位の諸表現としてのみ、これらの物の大きさは、同名の、したがって通訳可能な大きさなのである」(K. I, S.64)。

22 K. I, S.67.

23 K. I, S.66.

上着の生産では、実際に、裁縫という形態で、人間の労働力が支出されているので、この面から見れば、上着は「価値の担い手」である。しかし、リンネルの価値関係のなかでは、上着がただこの面だけから、したがってただ具体化された価値としてのみ、価値体としてのみ、認められる。こうして、上着がリンネルの等価物となっている価値関係のなかでは、上着形態は価値形態として認められる。

さらに、「A単純な、個別的な、または偶然的な価値形態」から「B全体的な、または展開された価値形態」への考察を経て、「C一般的価値形態」に移る。

Cでは、リンネルが一般的等価物になり、その物体は、いっさいの人間の労働の化身として認められる。織布、すなわちリンネルを生産する私的労働が、同時に、一般的な社会的形態に、すなわち他のすべての労働との同等性の形態にある。一般的価値形態をなしている無数の等式は、リンネルに実現されている労働を、他の商品に含まれているそれぞれの労働に順々に等置し、こうすることによって織布を人間の労働一般の一般的な現象形態にする。このようにして、商品価値に対象化されている労働は、いっさいの現実の労働がそれらに共通な人間の労働という性格に、人間の労働力の支出に、還元されたものとしてあらわれる。

ここまでのことをまとめる。商品体(使用価値)は、人間の労働の単なる対象化として、等しい人間労働力の支出として妥当し、だからまたこの内容は物の対象的性格として、物それ自身に物的に帰属する性格として、表示されている。しかし、この対象性はその自然形態においては現象しない。このことが価値形態を必要なものとする。価値は使用価値から離れて、独立的な定在を獲得する。そして、単純な価値形態から発展した一般的価値形態(さらに貨幣形態、価格形態)は一切の諸労働生産物を無差別

な人間労働の単なる凝固として表わすようになる。商品生産社会で、価値を生産するかぎりでは認識される、社会的実体としての「同等な人間の労働・抽象的人間労働」は、一般的等価形態、貨幣形態、価格形態をとる。現実的、具体的には、商品価値・価値実体は、金という物的形態をとる。

(5) 第4節 商品の呪物的性格とその秘密

第4節では、「同等な人間の労働」・「抽象的労働」は、私的諸労働が社会的労働を担うときに受け取る、独特な、労働の社会的性格の形態として現われること明らかにされる。

商品生産社会における私的諸労働は、同時に社会的労働をなしていなければならない。私的諸労働のこの独自の社会的性格は、労働生産物の交換において初めて現われ、私的諸労働は、交換によって、はじめて実際に社会的総労働の一環として実証される。労働生産物は、それらの交換のなかで初めて、社会的に同等な価値対象性を受けとる。

このような商品生産者間の生産関係が確立されているとき²⁴、生産者たちの私的諸労働は実際に二重の社会的性格を受け取る。それは、一面では、一定の有用労働として一定の社会的欲望を満たさなければならず、それにより社会的総労働の一環として自分の労働を実証しなければならない。他面では、特殊な有用な私的労働のそれぞれが別の種類の有用な私的労働のそれぞれと交換可能であり、したがってこれと同等と認められ、諸労働が人間の労働力の支出、抽象的労働としてもっている共通な性格へ還元される場合、これによって、私的諸労働がそれら自身の生産者たちのさまざまな欲望を満足させる²⁵。

この二面性は、当然ながら同時に不可分のものであり、私的労働によって生産された使用価値は、他人のための使用価値であるからこそ、

24 「商品生産者の一般的な社会的生産関係は、彼らの生産物を商品として、したがって価値として取り扱い、この物的な形態において彼らの私的労働を同等な人間労働として互いに関係させるということにある」(K. I, S.93)。

25 K. I, S.87～88。

その使用価値は価値として定在する。他人のための使用価値でなければ価値でもない。第2節で考察された「商品に表わされる労働の二重性」が、ここでは異なる課題のもとに、商品生産社会における「私的諸労働の二重の社会的性格」として、対応関係におかれているものと考えられる。

そこで、この2つの労働の二重性の対応関係を考慮して、つぎの記述に注意したい。

「労働生産物は、それが価値であるかぎりでは、その生産に支出された人間労働の単に物的な表現でしかないという後世の科学的発見は、人類の発展史上に一時代を画するものではあるが、しかしそれはけっして労働の社会的性格の対外的外観を追い払うものではない。（下線は引用者）この特殊な生産形態、商品生産だけに当てはまること、すなわち、互いに独立な私的諸労働の独自の社会的性格はそれらの労働の人間労働としての同等性にあるのであってこの社会的性格が労働生産物の価値性格の形態をとる」²⁶。

第4節では、私的諸労働が同時に社会的労働として、社会の総労働の一環を担うという独特な生産関係のなかで、私的諸労働が独特な、労働の社会的性格としての同等な人間の労働・抽

象的労働という形式を受けとっていることが明らかにされている。端的に表現すれば、「社会的労働の形態としての抽象的労働」が明らかにされていると考えられる。商品の価値は、どんな社会形態においても存在する、社会的労働力の支出としての労働の社会的性格を、歴史的に1つの形態において表現するものにすぎない。

2. 大谷禎之介氏の所説

まず、大谷氏の『図解 社会経済学』（桜井書店、2001年）の叙述における、抽象的労働に関する所説の内容をみる。叙述の順序は次の通りである。同書の序章第3節²⁷において、「生産費用としての労働」が考察され、「労働の二重性」、「抽象的労働」について説明される²⁸。さらに、「生産費用としての抽象的労働」が提示される。第1章第1節²⁹では、「商品価値の実体としての抽象的労働」が説明され、そして、「労働の二重性」は、商品生産のもとでは、「商品の二つの要因」という独自の形態をとると説明される。

つぎにこれらのタームの意味について順次みる。まず、「生産費用」についてである。生産費用（生産費・生産コスト）とは、「人間が生産物の生産に要する費用」であり、つまり、生産物を生産するのに支出される労働の量のことであ

26 K. I., S.88. また、第3篇6章にある記述であるが、つぎのものを引用する。「彼が彼の労働によって価値をつけ加えるのは、彼の労働が紡績労働や指物労働であるかぎりのことではなく、それが抽象的な社会的労働一般〔下線は引用者〕であるかぎりでのことであり、また、彼が一定の価値量をつけ加えるのは、彼の労働がある特殊な有用の内容をもっているからではなく、それが一定時間継続するからである。」(K. I., S.215)。

27 大谷禎之介『図解 社会経済学』（初版）桜井書店、2001年〔第14刷、2016年〕、16～21ページ。

28 そこで、注が付され、労働の二重性は、商品生産社会に固有の概念か否かという論点に言及され、著者は後者の立場から、前者を批判する。「このように、労働によって富を生産しなければならないあらゆる社会について、労働が、変形作用と人間労働力支出の二側面から考察されなければならないのに、「労働の二重性」は商品生産に固有の概念だとする抜きがたい思い込みが広まっている。このような主張をする人びとは、労働の生産力の発展にとまなう、生産物を生産する労働量の減少や、必須労働と剰余労働との区別を問題にするときには、労働を具体的な変形作用の違いを度外視した人間の労働力の支出として、つまりは抽象的労働として見ていることに気づいていないのである。これを抽象的労働と呼ぶべきでないとしたら、そのかわりに何と呼ぶのであろうか。」(同上書、17ページ)。補足として、同上書のもととなる論考での同氏の記述を引用する。「労働の二重性、とくに抽象的人間の労働について、それは超歴史的な範疇か、それとも商品生産に固有の歴史的範疇か、という論争が行なわれてきた。近年の論稿でこの点に積極的に関説するものには、さまざまなかたちでの歴史的範疇説が多いように思われる」(「労働を基礎とする社会把握と経済学の課題」『経済志林』法政大学経済学部学会、1993年、91ページ)。

29 大谷、前掲書、55～64ページ。

る。

「労働の二重性」とは、次のことである。どのような社会の労働であろうと、労働はつねに、自然素材の変形・加工であると同時に人間にとっての生産の費用である。この労働の二側面に立ち入ると、「質的にさまざまに異なる変形作用という側面と量的にただ異なる労働力支出という側面」が得られる。前者の意味での労働が具体的労働＝有目的労働と呼ばれ、後者の意味での労働が、抽象的労働＝人間的労働と呼ばれる。この労働の2つの側面が「労働の二重性」である。

「生産費用としての抽象的労働」とはつぎのことである。「生産費用としての労働とは、生産物を生産するのに必要な抽象的労働である。どんな生産物の生産費用としての労働も、同質の労働の量として比較し、また加算することが可能であるが、この場合の労働とは抽象的労働にほかならない。」³⁰「どんな社会でも、生産物の生産費用はそれを生産するのに必要な抽象的労働の量」³¹である。

「商品価値の実体としての抽象的労働」とそこでの「労働の二重性」については、2商品の交換比率を規定している価値を前提して、つぎのように説明される。「諸商品の使用価値を度外視すれば、それらに残るのは、それらがいずれも労働の生産物だという属性だけである。しかもここでの『労働』とは抽象的労働以外のものではありえない。つまり、抽象的労働が価値の実体なのである。」³²「ここでは、人間の活動である抽象的労働が、諸物のなかに対象化、物質化、凝結、結晶して、諸物の属性となっている。だから、価値とは、商品に対象化した抽象的労働にほかならない。」³³「労働の二重性は、あらゆる社会の労働に共通のものである。このような

労働そのものの二重性は、商品生産のもとでは、商品の二つの要因という独自の形態をとる。」³³

「商品の価値がそれに対象化した抽象的労働だ、というのは、じつは、商品の価値は、あらゆる社会に共通の、生産物の生産費用を、生産物の属性という独自な形態で表現しているのだ、ということにほかならない。商品生産の社会における独自性は、この生産費用すなわち抽象的労働が、生産物に対象化した価値という物象的な形態をとる、というところにあるのである。」³⁴

つぎに、マルクスの叙述に対しての大谷氏の叙述の独自性について考察する。それは、つぎのように整理できるであろう。

1)「生産費用」(生産物を生産するのに支出される労働の量)という意味での抽象的労働という概念が、商品の交換関係における使用価値の捨象から析出された「価値実体としての抽象的労働」に対して、叙述上、先行して説明され、歴史貫通的に用いられること。

2)マルクスの「商品に表わされる労働の二重性」における分析(人間の労働力の生理学的支出という労働の側面の抽出)が超歴史的に適用され、「労働の二重性は、あらゆる社会の労働に共通のもの」であると強調されること。

3)「価値実体としての抽象的労働」と叙述上、それに前出していた「生産費用としての抽象的労働」との間で理論的に調和がとられていること。すなわち、商品に対象化した抽象的労働は価値の実体であるが、商品の価値は、あらゆる社会に共通の、生産物の生産費用が、生産物の属性という独自な形態で表現されているものとして、とりあつかわれること。

そこで、マルクスの叙述に対する独自性という観点から決定的に焦点となるのは、1)で指摘した、「生産費用」³⁵という意味での抽象的労働

30 大谷、前掲書、20 ページ。

31 大谷、前掲書、56 ページ。

32 大谷、前掲書、55 ページ。

33 大谷、前掲書、55～56 ページ。

34 大谷、前掲書、56 ページ。

35『資本論』第3部第1篇第1章「費用価格と利潤」のところで「商品の資本家的費用」と「商品の現実の費用」(S.36)という語句が出てくる。大谷は同氏著、前掲書の第3篇第1章第2節「費用価格と利潤」で、「商品の生産費用を表わすのは商品の価値である。」(300 ページ)と記述し、そのところで、64 ページ

働³⁶である。2)、3)は1)を前提することになるからだ。まず明らかなのは、事実上、これが量的概念としてのみ取り扱われていることである。マルクスは第2節で、「人間的労働の質」について論じ、この同質なものに還元されてはじめて、労働量だけが問題になりうることを強調していた³⁷。価値実体はまず、諸労働の有用性が捨象され、質的に等置された「同等な人間的労働・抽象的労働」であった。そして、その尺度が労働量であった。またこの面からみれば、ある特定の使用価値の生産に必要なのは一定の労働量であり、その大きさは、社会的必要労働時間であり、価値の大きさを規定するものとして現われた。

すなわち、「生産費用としての抽象的労働」とは、抽象的労働がもつ1つの意味、人間の労働力の生理学的支出という意味に特化、限定され

たものしてみることができる。そのかぎりでは、マルクスが論じていた抽象的労働との相違はない。また、生産物の生産に支出された労働量が、生産の社会的形態には無関係な、人間と自然との交換の関係を意味するかぎりでは、「生産費用としての抽象的労働」はどの社会形態でも共通なものだといえるであろう。

ところで、なぜ、「商品生産の社会における独自性は、この生産費用すなわち抽象的労働が、生産物に対象化した価値という物象的な形態をとるところにある」のか、という問題をそこで立てるならば、「生産費用としての抽象的労働」という観点から、それに答えることはできない。どんな社会形態でも社会的労働が必要となるが、商品生産社会における労働の社会的性格を表わす要素が、当然ながら、その概念のなかにはないからである。マルクスは、第1章第4節

の図を参照するように指示している。そこには「生産費用としての新旧の労働(抽象的労働)」の説明があるで、この費用価格論で出てくる用語を抽象的労働の概念に適用していることがわかる。また、同書、300ページに、商品の現実の費用($cd + cz + v + m$)の大きさは「商品に含まれている対象化した労働量によって測られる」と記述されている。

36 大谷に先行して、価値実体はコストであると明確にいっているものとして、つぎの宇野弘蔵の記述がある。「価値の実体というときに今、云われるコストの問題、つまり凡ゆる社会に共通にコストする、それが価値の実体、これが価値の形態を受けるのは商品社会でなくては受けない、他の社会では価値の形態をとらない。実体は、どんな社会にも共通である、また共通でなければ商品経済で商品の価値形態をもとらない、どんな社会でも共通に要するコスト、人間が自然から獲得するに要する労働のコスト、それが価値の実体をなす、その実体をなすものが特殊の形態をとるところに、商品社会の性質がある」(向坂・宇野編、前掲書、98ページ)。河上肇の「価値人類犠牲説」(榊田民蔵がつぎの同氏の論考で、「マルクスの労働価値説—小泉教授の之に対する批評について—」(『河上肇全集』@岩波書店、1982年、356～419ページ、所収)に対して名付けたもの。「マルクスの価値概念にかんする一考察—河上博士の『価値人類犠牲説』にたいする若干の疑問—」(『榊田民蔵全集』(第2巻 価値および貨幣) 社会主義協会出版局、1978年、59～111ページ、所収)も、同じではないが、それに近いものとして位置づけられると考える。また、抽象的労働を巡る「超歴史的カテゴリー説」の論者として、山本二三丸、見田石介、吉原泰助各氏の氏名が挙がる(種瀬茂他編『資本論体系』(第2巻 商品・貨幣) 有斐閣、1984年、353～355ページ)。ほかにも鈴木鴻一郎の解説(「抽象的人間的労働」資本論辞典編集委員会編『資本論辞典』縮刷普及版、青木書店、1966年、347～349ページ、所収)がある。同氏は、マルクスは必ずしも強調しているわけではないとしながら、「マルクスの説くところによって」、抽象的労働が商品経済にのみ存在するのではないことを読み込んでいる。

37 『この』(マルクスの)『理論はしかしながら、一般的価値理論というよりはむしろリカードから由来する費用理論である。』「ヴァーグナー氏は『資本論』からでもジーベルの著書(略)からでも、私とリカードとの間の差異を知り[え]たはずである、すなわちリカードは事実上、単に価値の大きさの尺度として労働を論究したにしすぎなかった、だからこそ彼は、自分の価値理論と貨幣の本質との間に、何らの関係を見出せなかったのである」(マルクス『アードルフ・ヴァーグナー著「経済学教科書」への傍注』(『マルクス=エンゲルス全集』第19巻、大月書店、1968年、357ページ)。「ロートベルトゥス氏はリカードから価値の大きさの尺度を受けついで、が彼はリカードと同様に、価値の実体そのものを研究も理解もしなかった。例えば、共属する労働諸力の共同組織としての原始共同体における[労働過程]への「共同的」性格、だからまた彼らの労働の、すなわちこれらの労働諸力の支出の「共同的」性格がそうである」(マルクス、同上書、377ページ)。

において、そのような要素を「社会的労働の形態としての抽象的労働」として、明らかにしていたと考えている。大谷氏の『図解 社会経済学』では、その点を明示している箇所はみあたらない。

3. 抽象的人間的労働をどのようにとらえるか

本稿では、『資本論』第1部第1篇第1章の範囲において、抽象的労働についてマルクスがどのように論じているのかを確認した。それを通じて、大別するとつぎの3つのことを論じていることがわかった。1) 価値実体としての抽象的労働、2) 一般的価値形態（貨幣形態・価格形態）としての抽象的労働、3) 社会的労働の形態としての抽象的労働、である。

1) については、さらに①「抽象的労働の質」という側面と②量的な側面とがあり、価値実体として、まず①の重要性が明らかにされていた。それは、諸労働の有用性が捨象され、等置された「同等な労働・抽象的労働」であった。この質的に等置された諸労働という把握が、価値表現の秘密、貨幣の謎—使用価値がそのままその正反対の価値として妥当する謎—、商品の神秘的性格を明かす鍵となる。つまり、2)、3)への展開を可能にする。

2) では、商品生産社会で妥当する「同等な労働・抽象的労働」が、一般的価値形態（その完成形の貨幣形態、価格形態）として可視化される。この意味で、それは、商品生産社会における労働の一般的な人間的性格が労働の独自の社会的性格となっていることを明確に示している。

3) は、私的諸労働が同時に社会的労働として、社会の総労働の一環を担うという商品生産社会の生産関係のなかで、独自の労働の社会的性格としての「同等な人間的労働・抽象的労働」になっていることである。このような意味で、「社会的労働の形態としての抽象的労働」と呼んでいる。

『資本論』第1部第1篇第1章で展開される抽象的労働については、以上の3つの諸規定の統一として把握されるべきであると考えている。

別稿では、これらの諸規定相互の関連性などについてさらに研究する。

おわりに

労働の二重性、とくに抽象的労働について、それは超歴史的な範疇か、それとも商品生産に固有の歴史的範疇かという論争に則して、あえて述べておきたい。これまでの研究によってわかった、抽象的労働がもつ諸側面の統一という見地に立つと、それは超歴史的な範疇だともいえ、商品生産に固有の歴史的範疇であるともいえると考えている。

ただ、どちらかの立場に立ったとしても、そのアプローチのしかたは違えど、商品生産社会（資本主義社会）においては、抽象的労働という社会的実体が妥当し、不断に新価値が生産されており、その事実、たとえば、一国におけるGDP統計によって近似的に把握（固定資本減耗を控除のうえ）できることを否定する論者はいないであろう。しかし、未来社会を考えた場合には、どうだろうか。そこでの労働が社会の総労働力の支出の一部であり、したがってまた社会の総労働の一部であるという事実は依然として存在し続ける。それらの労働を総労働の一部として量的関係を問題にする場合には、つねにそれらの労働を抽象的な規定性、先に示した1) ②量的側面において考えていることになる。つまり、その超歴史的な側面が前面に出てくることになる。

抽象的労働を質的側面で見れば、それは歴史的範疇なのであり、抽象的労働を量的側面のみで見れば、それは超歴史的な範疇なのである。